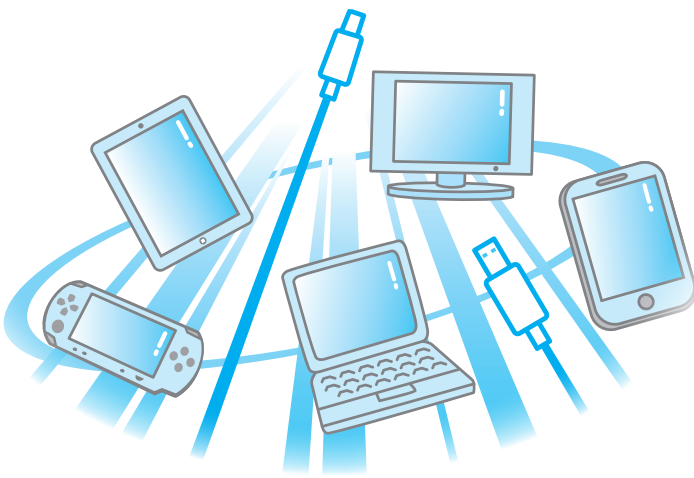


欧州ICT社会 読み解き術



誰でもアクセスできるウェブ…の巻

情報化社会が成熟すると、それに呼応して企業には、新たな社会的責任が生まれる。その一つが、企業のウェブサイト为谁にでもアクセスしやすく、情報の探しやすいものを作ることで、つまり、「ウェブ・アクセシビリティ」の向上である。このウェブ・アクセシビリティは、今や情報化社会のCSRと言われ、事実上の国際標準も存在する。筆者が住むスイスでは、すべての公共機関に、誰でもアクセスしやすく、使いやすいウェブサイトを構築するよう求める法律もあると言う。



栗崎 由子

情報化社会のCSR

ウェブサイトは、情報化社会に不可欠なインフラだ。だから、ウェブサイトの主要な製作者である企業には、誰にでも使いやすいサイトを作る責任がある。例えば、パソコンメーカーにとっては、パソコンの購入者だけでなく、そのメーカーのサイトにアクセスするすべての人が対象となる。当然、ウェブになじみの薄かった人や、障害者、高齢者の利用も視野に入れないといけない。

個々の企業が、自社のウェブサイト为谁にでもアクセスしやすいものになれば、世の中の情報インフラの質は、飛躍的に向上する。これはちやうど、地球温暖化の

進行を食いとめるために、個々の企業が二酸化炭素排出量を自主的に削減することと似ている。企業が、地球の環境に責任を負うように、情報環境の向上に貢献することは情報化社会のCSRである。

ウェブ・アクセシビリティ

ウェブ・アクセシビリティ(以下、WA)は、「誰でもアクセスで

きる」「使いやすい」という概念であるだけでなく、具体的な標準(つまり、広く合意された決めごと)を伴う技術でもある。

その標準は従来、WAに関心のある人々が自主的に作成したものである(Web Accessibility Initiative, WAI)。それが技術的に優れていること、他に比肩する技術標準がないこともあり、今では、約20カ国で技術標準として採用されるまでに至り、事実上の国際標準となった(<http://www.w3.org/WAI/>)。日本でも、JISが主体となって、日本に合うように補足された標準「JIS X8341」が作成されている。

スイスのWA

最近、ジュネーブで開かれた、WAセミナーに参加する機会を得て、州政府、ウェブ作成者、推進団体など、実際にスイスでWA推進に携わる人々の生の声を聞いた。

スイスでは、連邦法(身体障害者法、二〇〇四年成立)で、すべての公共機関は、そのウェブサイトが、WAIの定めたAAレベルを満た

することが義務づけられている。ここで言う公共機関の範囲は広い。政府機関は、連邦、州、市町村に至るまで、すべてが対象となる他、ラジオ、テレビ局、スイスポスト（郵便と貯金）、スイス国鉄、主要都市の市営交通など公共目的の企業体も同様の義務を負う。

WAの向上は、良（よ）くだが、現実問題として、実行に向かって弾みをつけるのが案外難しいことも事実。そこで、WAの向上を促すため、スイスでは、政府や公共企業のウェブサイトを評価し、その結果を公表している。評価するのは、「Access for all」（アクセスを誰にでも）という団体。現在、二〇一一年版の評価測定報告書が公表され、無料で配布されている。

この報告書は良くできていて、評価した各機関のサイトの良い点、改善点、参加機関のランキングを、図解入りでまとめている。各機関に対する講評も分かりやすい。参加機関には、これよりもずっと詳細な評価結果が知らされていると思うが、私は、この報告書を

アクセシビリティ推進の手段として注目したい。評価結果が公表されれば、各機関は競争せざるを得なくなるだろう。また、アクセシビリティという、まだなじみの薄い概念について、人々の関心を集める効果もある。

二ーズに合わせることを重要 Access for allは、目が不自由な人がアクセシビリティ測定チームに参加しており、その評価方法も興味深い。

テストするコルシウロ氏は、一例として、「僕が盲導犬を飼うには、行政側に対しどのような手続きが必要か？」という問いにウェブサイトに答えられるかどうかを見ます」と語った。実際の課題に役立つかというこのような視線は、アクセシビリティ技術を実際の場で生かすために不可欠である。アクセシビリティ向上と云われ、ともすれば、技術標準どおりだから合格と考えるウェブ製作者もいるかもしれない。

しかし、アクセシビリティの目的は、それを切実に必要とする

人がウェブサイトを実際に使って、目的を達成できるようにすることだ。技術は大切な一歩だが、アクセシビリティは、最後はその利用者の意見を組み込んで、完成させなければならぬ。

スイスに、その体制ができていくことは、役に立つアクセシビリティを実現するための地に足着いた手段として、評価したい。ラスト1マイルの利便向上を「それでも」と、コルシウロ氏は語る。多数の公共機関のWA向上は徐々に進んでいるが、彼が利用者として見ると、その動きはまだ点の状態だと言う。

例えば、ウェブサイトのアクセシビリティ評価は、五つ星で満点のチューリヒ州。毎年収入申告という複雑な作業も、目の不自由な人がウェブでできる。ところが、その後がいけない。行政手続きとして、インプットの終わったページをプリントアウトし、サインして、税務署に郵送することになっているのだ。目が不自由な人が、すべて一人で行なう

には、難しい作業ではないか！

確かに、最後の1マイルの不便は、どの機関、団体にもあるだろう。ウェブサイトのアクセシビリティ向上は、現代社会の情報環境の大きな前進である。けれども、ウェブサイトの利用は、何かをするための一連の動作線にある大切な一部だが、それだけで目的を達することはできない。

ウェブへのアクセシビリティの向上が、ウェブを含む一つの目的を持った行動のプロセス全体のアクセシビリティ向上に繋がることを期待したい。

栗崎由子（くりさき よしこ）

一九七八年、日本電信電話公社入社。先端技術の商品化、市場調査等を担当。パリの経済協力開発機構（OECD）、SITA（航空会社間の世界規模データ通信会社）で、情報通信政策や市場戦略調査担当。現在は独立コンサルタント。ボランティアとして、BHNテレコム協議会ヨーロッパ代表。関心領域は、ICTと人・社会・産業との関係、情報化社会のCSR。ジュネーブ在住。

yoshiko@geneva-kurtsaki.net